

(大正10年4月22日第3種郵便物認可 昭和7年8月15日發行(毎月1回15日發行))

# 滿洲建築雜誌

第二十二卷 第八號



新「鐵骨構造計算規準」案と小屋組算定の一例  
帶繫桿橫架材を有する「ラーメン」の解法  
新興國家の築建

滿洲建築協會



高礬土質耐火煉瓦 SK#3G 以上

沖任土質耐火煉瓦 #S.K 30-35

耐酸煉瓦各種

鋪道煉瓦各種

專賣 鐵筋煉瓦各種

空洞煉瓦各種

機械製煉瓦各種

# 營口窯業株式會社

大連工場・大連市春柳區三春柳一番地  
電話(4)1097・(4)2202 (4)2836

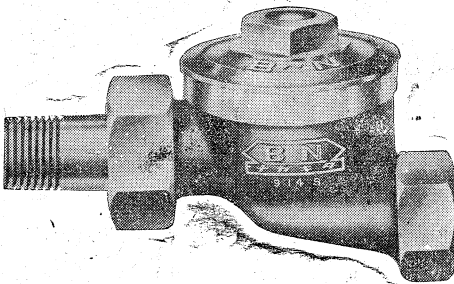
新京工場・新京特別市長春區東安屯  
電話(3)4708



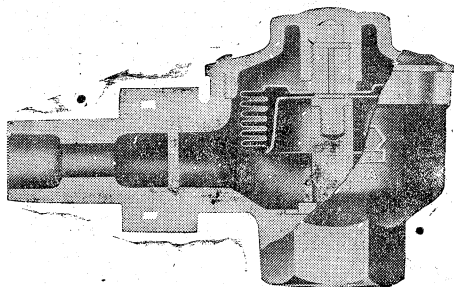
株式會社  
**中北製作所**

放熱器用 **スチームトラップ**

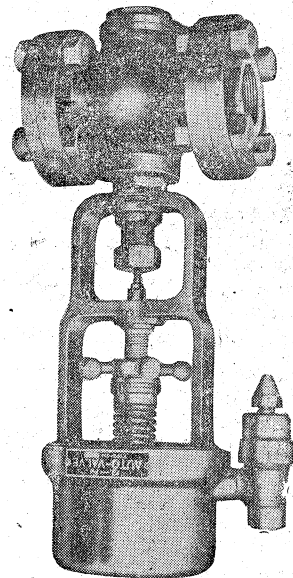
自働排水 減 壓 弁  
不凍式



BN 914-S型  
スチーム トラップ



BN 914-A型  
スチーム トラップ



BN 421 號型  
不凍式減壓弁

温度・湿度・壓力・水準により操作  
する各種自働スイッチ・バルブ八拾  
餘種製作.....

型 錄 進 呈

株式會社 中 北 製 作 所

本社・工場 大阪市旭區蒲生町三丁目 電話堀川2713・2714・2715・5508番  
東京營業所 東京市芝區金杉町四ノ二二 電話三田 1510 番

滿 關 代 理 店

株式會社 安宅商會機械部  
奉天市浪速通二八(都ビル)  
大連市山縣通二(東拓ビル)  
新京特別市八島通三八

滿 關 販 賣 店

株式會社 坂井忠商店  
新京市興安通三〇 電話代蒙②2518  
奉天市鐵西區嘉工街一段八 電話③3624  
大連市但馬町八〇 電話②6007

(技術員常時駐在し技術上の御相談に應じて居ります)

# 滿洲建築雜誌 第22卷 第8號

## 目 次

### 本 文

- 研究獎勵規定としての學術賞設定への要望 ..... 鷺 尾 健 三... (1)
- 新「鐵骨構造計算規準」案と小屋組算の一例 ..... 矢 崎 高 儀... (3)
- 帶繫桿橫架材を有する「ラーメン」の解法(2) ..... 服 部 逸 治... (17)
- 新興國家の建築 ..... 室 井 修... (27)

### 經 緯

- 住宅談義 ..... 藥 師 神 賢 ..... (35)

### 時 報

- 生活科學化委員會下打合記錄 ..... (36)
- 同會役員名簿 ..... (36)
- 建築分科會協議會 ..... (37)
- 建築分科會編輯委員會 ..... (38)
- 建築分科會第2回編輯委員會 ..... (39)

### 會 報

- 編輯部會 ..... (40)
- 理事會 ..... (40)

# 研究獎勵規定としての 學術賞設定への要望

鷺尾健三

本年1月に協和會科學技術聯合部會が結成せられ、滿洲を打つて一丸とする研究促進その他の事業が着々計畫・實施される事になつたのであるが、我々建築關係部門に於ては、残念乍ら内地と違つて研究者の不足が否定出來ぬ事實である。研究を促進させる爲には、既存研究者をして相互に聯繫を十分とらしめ、研究能率の増進を圖らせる事も勿論必要である。然し、此の不足してゐる研究者の數を増加させる事も亦、必要缺くべからざる手段の一つである。然らば、研究者數を増加させるにはどうすれば良いのであらうか。

良い研究者の増加を圖る爲の根本策は、國民の一人々々に科學的な考へ方や物の取扱ひ方を浸透させるにある事は勿論であるが、それだけでは不十分ではなからうか。自分には、さうして漸次作り上げられた國民の中に混つてゐる研究者の卵を取り上げて、研究者として具體的に養成し仕上げる事も亦、非常に大切な事であると考へられる。その研究者養成には、良い研究機關に屬する良い研究者の手許にあつてその指導を受けさせるのを最善の方法とするが、研究機關や研究者の少い我が滿洲建築界の現状では、その方法によるだけでは十分に目的を達する事は出來ないであらう。研究發表懇談會の様な會合に出席して、他箇所の良い研究者の指導を直接・間接に受けると云ふ方法もないではないが、その様な會合に出席して收穫を得る事が出来る境地まで引き上げられ養成される迄が問題なのである。若し此の難關を突破し得て、研究に關する會合に出席出来る程度になれば、その後の仕上げは比較的容易なのである。我が滿洲建築雜誌が學術雜誌の面を持ち乍ら、建築學會論文集等とは違つて、投稿者に比較的氣樂な氣持を與へ、比較的低度の我々研究者にも研究發表の機會を容易に與へて呉れてゐる實狀は、上に述べた低度研究者育成の立場から見ると非常に有難い事である。然し、折角奮起したそれら研究者に對し、唯單に發表の機會を與へると云ふだけでは、その發表者その他がそれら研究成果の善惡を知り將來の資とする事が出來ない譯で、研究者育成・研究促進の爲の積極的な役目を十分果さない事になるのではなからうか。此の時、若し、發表された論文に對して何等かの積極的な指導がされたとすると、その結果は上の場合と比較し明らかであらう。以上の様な事から考へられ、又、是非その實現を要望したいのが、之から述べようとする學術賞即ち既發表論文に對する表彰規定の設定である。之は既に建築學會に於て實施され好結果を得てゐる事は周知の通りであるが、以上の議論から分るやうに、我が滿洲に於てこそ眞に必要な事業ではなからうか。